

空手道の歴史とオリンピック種目採用についての一考察

One consideration about the history and the Olympics item adoption of the Karate

1K10C336-1 蜂須 勇太

主査 友添秀則 先生

副査 志々田文明 先生

【本研究の動機】

私は小学校3年生の時から空手を習い、空手から礼儀、相手をリスペクトする気持ち、努力することの大切さといった人として大切なことをたくさん学んできた。

現在の空手には多数の流派やジャンルが存在しているが、その基を辿っていくと全て沖縄空手(唐手)に行き着くことを在学中に知った。沖縄空手が現在の空手に至るまでの経緯を明らかにしたいと思ったのが一番の動機である。

また、2013年5月にロシアで行われた、2020年のオリンピック種目選定でレスリング等の競技に敗れてしまったことは記憶に新しい。オリンピックの正式種目には選ばれることは空手界において一つの目標となっている。本研究で空手のオリンピック種目採用についての考察を行うことで、空手の更なる普及、発展を遂げる足掛かりとなればと考え、本研究のテーマを設定するに至った。

【本研究の目的】

本研究では、空手の歴史、現在の空手の現状や課題を加味しながら、空手のオリンピック種目採用についての可能性及び、その是非を明らかにし、空手が将来的に更なる普及・発展を遂げる足掛かりになることを目的とする。

【本研究の方法】

本研究は文献資料を中心に分析、並びに考察を行っていく。

【第1章】沖縄空手の歴史

空手はもともと、「唐手」と表記されていた。現在の空手は中国拳法(沖縄の人たちはこれを「トウディー」と呼んでいた)が沖縄に伝えられ、それが日本剣術の身体思想やその操作といった考え方と融合されて「手(ディー)」となったものが母体とされている。

「手」は沖縄の各地で独自に発展を遂げていく。その背景には3度に及ぶ「武禁政策」がある。各地域で独自に発展していった「手」には各地域名が冠せられるようになり、「首里手」「那覇手」と区別されるようになる。これが後に様々な流派へと分かれていく要因となっている。「首里手」の開祖とされている、「松村宗昆」は空手の歴史を語るうえで欠かせない人物である。

1879年に当時の沖縄を支配していた琉球王国が滅亡を迎える。その結果、各地域で発達していった「手」の

存続も危ぶまれてしまう。それを救ったのが「近代空手の祖」と言われている「糸洲安恒」である。糸洲は「手(首里手)」を「武術」から「教育の教材」へと変えることで存続の危機から救った。そして名が「唐手」となる。

その後「唐手」は「船越義珍」らによって本土へ普及される。

【第2章】本土空手の歴史と現在の空手道

本土での唐手の普及は主に大学によってなされていく。船越は「不闘の武術」として唐手を伝えたが、大学では次第に鍛錬の成果を対人組手によって示したいという意欲が湧くようになる。それによって現在の空手のルールが形作られるようになる。昭和59年頃に試合規定、及び審判規程が成文化され、1964年について「全日本空手道連盟(全空連)」が誕生する。この時期に名前が「唐手」から「空手」へと変えられている。

現在空手は世界的に普及しているが、同時に様々な課題を抱えている。その一つひとつを克服することで空手がより一層普及・発展していくと考える。

【第3章】空手のオリンピック種目採用についての一考察

オリンピック出場は全空連の一つの大きな目標である。2020年の選定では空手は有力な候補とされていながらも、他競技に敗れてしまった。今後もオリンピック出場へ向けた取り組みは成されていくだろう。オリンピック憲章と照らし合わせてみると、空手には「安全面」、「審判の勝敗決定の主観面」、「競技のわかりやすさの面」でまだまだ課題を残していると分析できる。今後、それらの課題の改善に着手することで、空手のオリンピック出場への道が開けてくると考える。

【結章】本研究のまとめ

空手は沖縄の武術、「手」が様々な経緯を経て、発展してきたものである。現在、空手は様々な課題を抱えているが、その課題の中で、最も重要視されていることの一つが空手のオリンピック種目正式採用である。2020年の種目採用の実現には至らなかったものの、今後の取り組みによって、実現できる可能性は大いにあると考えられる。しかし、その中で「武道」の価値観の消失が懸念されている。「国際化」、「武道の価値観の継承」の両方を実現することが空手界の一番の目標であると言える。